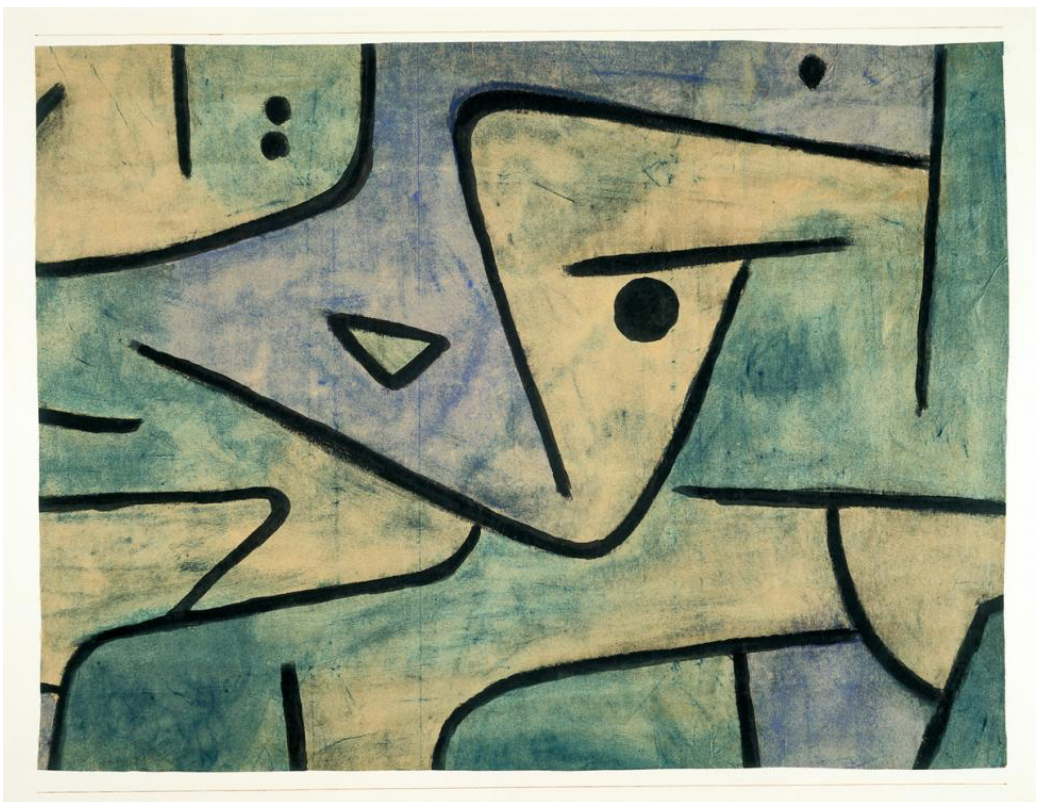


第十一回

美しい日本語で詩を聴く会

朗読詩集 2025. 1. 11

お題 「メロディ」



東京のメロディ 上村多恵子 2

メロディー 下田喜久美 4

オルガンの日 北原千代 6

メロディー もみにやーじ 8

美和山 波野 仁 10

音は移ろふ 清水崇彦 12

風の譜面 スノードロップ 14

桜花のメロディ 主旋律 春名江吏子 16

初恋悲曲 すみくらまりこ 18

不協和音 石田真弓 22

百日草 吉村侑久代 24

長崎幻花 有馬 敲 26

彼らは歌う ダンテ・マッファイア 28

東京のメロディ 上村多恵子

天に届きそうな

空をこすった摩天楼から

しばし東京を

ながめせし間に

光のまばゆさは

宝石箱とブラックボックスを

見事な手品師が操つる

ひとときのイリュージョンのようだ

ハイウェイは

野望と希望と羨望の滑走路へと続くかのようだ

夜が東京の表も裏も

呑み込んでいる

音のない遠花火が

落ちてゆく

隅田川の川面が

光でゆれている

『柳橋から小舟で急がせ』^注

お江戸の景色は変わったと

昔の粹人たちは言うだろうか

夜へのとばりを

お届けしましょうね

スカイスクレイパー東京より

注

江戸端唄「梅は咲いたか」
(<https://youtu.be/bnujaSoUvrvw?si=rFjQ5QmrnsE3bfvH>) 参照。

メロデュー 下田喜久美

ある日携帯が 鳴った

何気なくとったあの日

素晴らしい音楽が鳴った

どなたなのかしら

切なく誘う 優しいリズム

初めて聞く紫のアメジスト色の音の花畑

その空気をつかむ 花のため息

どうしても行けなかったあの約束

そのあとでできた名前のないお便り

志と言葉が先行してやはりハイヒールは止まった
ゆけなかったのだ

音楽のさようならを

あの人はいつてきてくださった

ピアノは歌っている メロデューが走ってゆく

迎えに来るリズムの余韻

刹那の判断がこうして

花のように燃えている

やはり行く道のない迷子の私

私が望んだのに

ごめんなさいも言えないまま

たどたどしい人生をだいたまま

メロデーのまゆに包まれて

オルガンの日 北原 千代

ゆうべ天使が

鍵盤のささくれに羽根をひっかけて

おだいじにね と言った

毀れ^{こわ}つつあるらしいわたしのオルガン

そういえばきのうもおとといもちいさな嵐に刺さ

れた

突風はいつもとつぜんやってくる

これもあれもしぜんのことだれにもくること

いくつかの鍵盤は欠け

いくつかの螺^{ねじ}子は錆び

それでもまだ毀れていないまだ毀れたりしない

黒鍵と白鍵はおなじみの顔をして並び

指をあずけるとすぐにうたう

通いなれたこみちだから

うたはじぶんでうたってしまふ

よしろう、かつき、なみ、うらら、

あなたたちは知らないでしょう

あのころわたしは作曲家だった

たった一度きりのうたを千より多く知っていた

だれかがなかに入っているみたいに頑丈で

口紅もおしろいもせずしんみりときれいだった

たくさんのだれかが着古したエプロンを

あたらしい手で巻きなおい

かぼそいあなたやみつしり太ったあなたを

鍵盤のうえで遊ばせた

波うつ黒髪をきつく束ね

だれも倒れないよう倒れませんよう

まいにちおなじことをあたらしくねがった

よしろう、かつき、なみ、うらら、

わたしの指はひとりでに先をゆく

かるくなつた髪がすこし揺れているでしょう

ふかいところが鳴動している

メロデュー もみにやーじ

を

近くから 遠くから ずっと見守っていたい

窓辺に立って グラウンドを眺めてる

君の長い黒髪が 風に吹かれている

振り向きざまに 髪をかき上げた時

頬を伝い 涙の粒が 一つ 零れ落ちた

気のせいだよと 歯を見せて笑った君

強がりな性質^{たち} 知ってはいたけれど

君のその心に あふれそうな メロデュー たくさんの感情

音に変えて 言葉に変えて この空 解き放て

夢を追いかけて 傷ついては また 立ち上がる君

美和山 波野 仁

たらちねの 母の乳房に相似たり

美味し 麗し 山の端に

大神（おおみや） 坐す おわします

ぬばたまの 闇打ち払え

荒魂（アラミタマ）

布瑠（ふる） 布瑠 と

その顎（おとがい） 振り翳（かざ）し

数多（あまた）の穢（けが）れ 喰らい尽くせよ

オオナムチ

ひさかたの 光授けよ

和魂（ニギミタマ）

布瑠 布瑠 と

その腕（かいな） 差し交へて

幾多（あまた）の憂い 掬（すく）い攫（さら）えよ

オオモノヌシ

吾（われ） 十種（トクサ）の宝 持ち翳（かざ）し

伏して 乞いし

たたなづく

青垣 恋し

音は移ろふ 清水崇彦

音の出づ音の消ゆつはおなじこと

音曲なつはありやなしやと

音楽は不思議なもの

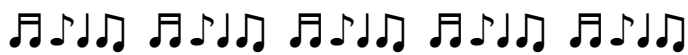
音が鳴った瞬間 もう

消えている 次の音が鳴る

やはり 瞬時に消える

音の在ることと 無いこと

生成と消滅が ほぼ同時なのだ



まるでコインの裏表

しかもそれが連続する

千切らつゝ音の束をば聴きおかば

旋律なりと思ひ浮かぶか

もしかして

切れ切れの音の微小な連鎖が

ふと 感覚を呼び覚まし

そのつながりが

旋律として 理解されるのか

されば 感覚は感情となり

感情は想いとなって やがて

心の建築となるのであろう

相まみゆ絵なればなべて愛づつだに

音曲あだに移ろふばかり

音楽は

絵画のように 立ち止まって

全体を眺めることができない

楽譜は作品ではない

演奏されて初めて作品となる

かくして 再現されるまで

音楽には 形もなく実体もない

あくまでも 不確定だ



あらはれてやがて消ゆつは移ろひぞ

音曲なつは時にこそあらめ

音が現れては消える

つまりは移ろいだ

移ろいは変化 畢竟（ひっきょう） 時間

芸術としての時間

作品は数百年も残る

歴史的時間に残る だが

演奏は芸術的時間

いつも つかの間に音がおどる

風の譜面 スノードロップ

珍しく早起きをした日

庭に出てみると風が吹いてきた

木々たちの葉音がきこえて

それから鳥が鳴いた

近くの池の水の音

そして、猫が鳴いた

風はそれらを譜面にかいていた

珍しく手紙が届いた日

庭を見ていると雨が降ってきた

屋根に落ちる雨音

それからカエルが鳴いた

池に落ちる雨音

そして、猫が鳴いた

風はそれらを譜面にかいていた

珍しく草取りができた日

庭に座っていると風はやんでいた

譜面を見ようと後をつけて

それからそつとのぞいた

けれど譜面はもうなかった

そして、猫が鳴いた

風はなにを譜面にかいたのだろうか

風はなにを譜面にかいたのだろうか

桜花のメロディ 主旋律 春名江吏子

春はピンク 花樂しませ

夏はグリーン 葉っぱ日陰つくり

秋はイエロー 落葉ふみしめ

冬はブラック 幹より空眺め

桜春咲き メロディ主旋律

冬のおわり 幹本来の色彩

一年のエネルギー凝縮し

幹ブラックに変調する

気づかない季節のフレーズ副旋律

以上 一編 投稿します。

よろしくお願いいたします。

初恋悲曲 すみくらまりこ

壺

もう

どこを探しても

あの時の二人はいない

もし

すれ違ったとしても

あの時の二人ではない

ほんの

ささやかな幸せを

分かち合っただけで

じつに

重い悲しみを

背負うこととなった

さやさや

笹が鳴っていた

実相院門跡で
もんぜき

そつと

御仏が二人の魂を

抱きとり給うた夜

もう

二人の影が

歩くこともなく―

ほら

いまでも 鈴虫が

悲しい曲を歌っている

式

ただ

路上で影法師が

遊んでいた

ときに

地図の上で

隠れん坊をしていた

でも

影踏みは

決してしなかった

そう

悲しい曲を

離れて奏でていた

いつも

このピアノが歌い

そのチェロが泣いた

あの

六十分の楽曲を

名づけたらどうだろう

ただ

その奏者だけが

聴ける楽音

ほら

目を閉じて

メロディ
旋律に身を任せよう

不協和音 石田真弓

不協和音がする

馴染まない美しさ

美しい不協和音だ

小さな不協和音

大きな不協和音

世界は不協和音に満ちている

あらゆるものの自由から

不協和音は生じる

男と女もない

東と西もない

過去も未来もない

すべてが混在し

常に今だ

カオスから生じる不協和音

馴れ合いの醜さ

馴れ合いの鈍さ

不協和音こそは美しい

不協和音に

矜持が生まれるとき

不協和音は

バランスと

強さと

深い静けさを孕^{はら}む

作品の持つ不協和音は

なんという美学だ

箸の先に

大粒のダイヤモンドが光る

百日草 吉村侑久代

あなたが住んでいた家の一角は
取り払われて

公園になりました

そこに百日草が植えられて

小さな滑り台と

ブランコが設置されて

時折子供のかわいい声が聞こえます

まだ

あなたがそこにすんでいるかのように

わたしは

闇にまぎれて

ブランコの乗っています

今もあなたの住所は

ここだと

思っているわたしは

しばらくの間

あなたの新しい住所をさがしません

百日草が

枯れるまで

ブランコは揺れているでしょう

一緒にハミングした

メロディーに合わせて

長崎幻花 有馬 敲

霧雨の降りしきる道ばたに

あじさいの球の群れが揺れている

「こちらのほうでは

〈おたくさ〉と呼ばれております」

土地のすらりとした少女は

うす紫に開く花の前に立ち止まり

両眼を細めてうつむくと

紅いこうもり傘のなかでほお笑んだ

ゆつくり歩く切り通し

濡れた石だたみの坂道は

さきほど見てきた大きなべつ甲の

ぬめぬめした背中を思いださす

丘の上のミッションスクールから

下校する女学生が 三々五々

羽ばたく足取りですれ違つて

古い洋館の側を通り抜け

ロザリオと関係がないおしゃべりをして

下界の家へ帰ってゆく

♪ あっか 赤とバイカナキンバイ 赤とバイカナキン

バイ

ふいに耳が鳴って

案内してくれた少女の口ずさむ唄が

別れたあとからよみがえり

紅いこうもり傘のむこうから

あの戦火に焼かれた坂道の多い街の姿が

まっ赤に浮かびあがってきた

ぎざぎざになった深い入江

霧雨が降りしきる視界のなかに

淡紅に変わったあじさいの球の群れが

わずかに揺れている

注

「こちらのほうでは

〈おたくさ〉と呼ばれております」

できれば長崎弁で読んでください。

「赤とバイカナキンバイ 赤とバーイカナキンバイ
オランダさんからもろたとバーイバイ」

<https://youtu.be/C6St1nPD2jw?si=KUPnpaok6mRUW8e>

(ビデオを見ていただき、この節をつけて赤とバイカ
ナキンバイと歌ってください)

彼らは歌う　ダンテ・マツファイア

全宇宙が。

俺たちが初キスをしている間。

彼らは歌う

コオロギが歌い、

星は歌い、

花は歌い、

通りは歌い、

広場は歌い、

月が歌い、

四方（よも）の海の波が歌い、

箒の匂いが歌う

そしてバラの香りが、

イルカやクジラが歌い、

非売品

二〇二五年一月十一日

(C) 日本国際詩人協会